

日本の文化の様相を考える上で、誠に示唆深い資料であろうと思われる。

近代日本の出発は明治維新ではなく、杉田玄白の『解体新書』の翻訳にはじまった、というのが、いまや定説となったようである。その玄白が翻訳の苦心を綴った名著『蘭学事始』は、何故か明治以前の筆写本が極めて少なく、しかもそれらには『蘭東事始』と『和蘭事始』という二種の題名が伝えられているが、『蘭学事始』と題する筆写本はまだ発見されていない。この興味深い謎の解明にも、本書に収められた大槻玄沢の手紙が、一つの大きな手がかりを与えている。即ち、『蘭学事始』の写本入手を熱望した浩齋に対して、玄沢から彼に贈られたものは『蘭東事始』であったが、玄沢はそのどちらとも自分が命名した題名である事を浩齋に説明しているのである。

このことは既に木々康子氏がその著書『蒼龍の系譜』で紹介され、話題を呼んだものであるが、このたびその資料の全貌を知ることが出来ることは誠に有難いことである。この多数の貴重な資料を丹念に解説され、公表された著者のご努力に対して、改めて敬意を表したいと思う。

本書は、北陸の蘭方外科医長崎浩齋の業績とその生涯について、伝記的、書誌学的研究をも含めて詳細に、親切に解説せられた医史学及び蘭学史研究の好著であり、更に広く日本の文化史的研究への拡がりをもった興味ある労作といえよう。

(津田 進三)

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二一七、電話〇七五一一七  
五一―一七八一、一九九三年、四六判、三三二頁、定価九〇六  
四円〕

トーマス・D・ブロック 著

長木大三・添川正夫 訳

『ローベルト・コッホ

医学の原野を切り拓いた忍耐と信念の人』

「不思議なことに英語で書かれたコッホの本格的な伝記本はまだ出ていない。本当のところドイツ語で書かれたコッホの伝記はあっても陳腐であり、およそとりつきにくい」と著者が序言のべているように、本書はこの欠点をあらためようとのつよい意気こみによつて執筆されたコッホの伝記である。

この事情はわが国でも同様で、日本語でよめるコッホの伝記は皆無にひとしいといつてもよい状況である。レイ・パスツールにくらべると、同じ細菌学者であり、近代細菌学の創成期に偉大な業績をあげた人物でありながら、あまりの格差に不思議な感をいだかざるをえない。

本書の原著者トーマス・D・ブロック（一九二六―）は、ウィスコンシン大学の傑出した微生物学者で、数おおくの論文を発表しており、『*Biology of Microorganisms* (1988)』は定評ある教科書としておおくの読者をえている。また医史学書

*Milestones in Microbiology*(1961)は、藤野恒三郎の監修によって『微生物学の一里塚』(近代出版 一九八五)として翻訳出版されていることは、よくご存知のことだろう。

一方訳者らは、コッホと因縁の深い北里研究所において重要な地位をしめており、わが国の微生物学界において碩学として知られている。また医史学の分野においても、長木大三には『北里柴三郎とその一門』(一九八九)をはじめとするおおくの著者があり、添川正夫——著者に北里研究所所蔵のコッホ関係の資料を提供したという——には、『日本痘苗史序説』(一九八七)など種痘史関係の著書がおおい。微生物学のみなならず、医史学にも造詣の深い二人の訳者によって訳出されたことは、まさに適切な人をえた訳書というに価しよう。

本書の原題は *Robert Koch: A Life in Medicine and Bacteriology*(1988)である。訳書の副題は訳者らのコッホへの崇敬のあらわれとみるべきだろう。全二二章にわけられ、「豊富な資料に基づいて、精細に、正確に、しかも偉人崇拜に陥ることなく」コッホの六七年にわたる生涯をつたえている。その第一章「緒言」にはコッホの医学上の主な業績が、一七項目にわたって列挙されている。これを見ると細菌学の基礎ともいえるべき培養法の案出から、一つ一つの業績をつみかさねて細菌学を大成させた状況がよく把握でき、まさに「細菌学の父」とよばれるにふさわしい人物であることを実感させてくれる。

つましい出自から身をおこし、田舎医師の経歴をへて、

ついにノーベル賞受賞者としての成功までの生涯を、コッホ自身の論文と、ブルーノ・ハイマン著 *Robert Koch I. Teil 1843-1882* とベルンハルト・メラース著 *Robert Koch——Persönlichkeit und Lebenswerk 1843-1910* の詳細なコッホの伝記を基本資料としてかきあげたのが本書であるが、著者ブロック自身が一九世紀末の細菌学の文献に目をおしてそれを補強したことによって、細菌学の歴史の流れを的確に把握している様子をよみとることができる。

ヒトや動植物を通じて伝染病のどの領域の研究にも必須の実験基盤である、いわゆるコッホの条件を提唱し、炭疽菌の生活環や、結核菌、コレラ菌の発見など、コッホの医学上の重要な業績についてとり上げられているのももちろんのことであるが、無効におわった結核にたいするツベルクリン療法についても、かなりのページをさいて正しい批判を展開しているのは好感がもてる。

「若いころには彼はおおむね正しかったのだが、晩年にはとどきき誤りを犯したのも、それを認めようとはしなかった」(二五九ページ)はその一例であるが、コッホの人間性についても随所でその欠点を指摘するなど、本書がけつしてコッホの顕彰的伝記でないことをしめしている。

最後の第二章は「コッホと彼の業績の評価」である。これをよんだだけでも、著者がどのようなスタンスでコッホに相対したかをうかがいすることができる。

(深瀬 泰且)